

副鼻腔炎の最先端医療

医療ジャーナリスト・伊藤隼也

- ①年間1000万人以上が発症する「国民病」
- ②現在では手術は内視鏡手術が主流
- ③ナビゲーションにより手術のリスクが低減

昔は「青っぽな」をたらした子どもが街のあちこちを飛び回っていた。鼻汁を服の袖で拭くから袖は汚れてガサガサになり、学生服ともなれば黒光りしていたものだ。この腕白坊主の歎章「青っぱな」こそが、今回取り上げる副鼻腔炎のもとである。

風邪は治ったのに、どうも鼻のグズグズだけが治らない。鼻をかむと、黄緑がかつてどろどろした鼻汁が出る。おまけに、鼻の周りが痛み、イヤな臭いがないだろうか。

鼻の周りには副鼻腔と呼ばれる空洞がいくつかある。副鼻腔

炎になると、この周辺の粘膜に炎症が起こり、空洞に膿がたまつてこうした症状が起こる。昔は細菌やウイルスが主な原因といわれていたが、最近ではアルギンが引き金になって白っぽい鼻汁が出ることも多いようだ。患者数は減少傾向にあるものの、毎年1000万～1500万人が発症しており、「国民病」のひとつといつても過言ではない。

治療は軽症であれば点鼻薬や内服薬などの薬物療法が中心となる。一方、膿がたまり炎症が広がつ

て発熱などの症状が出てくる重症の場合は手術が必要だが、実はこの手術、鼻の奥が脳底に極めて近いため、危ない手術の代

替だ。今回は、この手術を安全に行うためにナビゲーションシステムを活用している病院があると聞き、東京慈恵会医科大学附属病院耳鼻咽喉科の鴻信

義医師のもとを訪れた。

さっそく手術の様子を見せてもらつた。患者は50代の女性だ。

全身麻酔をかけられて、ベッドに横たわっている。患者の頭と

手術器具には反射器が取り付けられており、頭上にある発信器の赤外線を反射して手術器具の位置を知らせる。カーナビが人

工衛星に位置情報を伝える様子を思

い浮かべていただければいいだろ

う。モニターにはあらかじめ撮影された頭部のCT画像が表示されおり、この上に手術器具の現在位置がリアルタイムに現れる仕組みだ。

手術は、鼻の穴に内視鏡と特殊な器具を差し込み、モニターを見ながらたまたま脳を吸い出す作業が中心となる。時間は1時間半ほどだ。

「今日は7割ほどの膿を取り除きました。術後のケアをしながら様子を見ていれば、残りの膿も排出されるでしょう。副鼻腔炎になると、鼻のウイルスや細菌を排出する機能が働かなくなりますが、手術のあとしばらく経てば自然に回復するのです」

日本で副鼻腔炎の内視鏡手術が広まったのは、'90年代以降のこと。それまでは上唇をめく

（鴻医師）

「今日は7割ほどの膿を取り除

きました。術後のケアをしながら様子を見ていれば、残りの膿も排出されるでしょう。副鼻腔炎になると、鼻のウイルスや細菌を排出する機能が働かなくなりますが、手術のあとしばらく経てば自然に回復するのです」

（鴻医師）

日本で副鼻腔炎の内視鏡手術が広まったのは、'90年代以降のこと。それまでは上唇をめく